新田次郎全集

第十九巻

新田次郎全集 19

富士に死す
算士秘伝

新潮社版

富士に死す・算士秘伝
新田次郎全集第十九巻

昭和五十一年二月二十五日発行
昭和五十四年七月二十五日四刷

定価一一〇〇円

著者　新田次郎

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社

東京都新宿区矢来町七一〒162　振替東京四一八〇八
電話　業務部03(266)五一一一　編集部(266)五四一一

印刷　株式会社金羊社
製本　神田　加藤製本

© Jiro Nitta, 1976, Printed in Japan

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

富士に死す　5
*
鳥人伝　117
算士秘伝　145
灯明堂物語　163
時の日　183
二十一万石の数学者　205
梅雨将軍信長　215
豪雪に敗けた柴田勝家　233
佐々成政の北アルプス越え　249
女人禁制　267

赤毛の司天台 285
仁田四郎忠常異聞 303
凶年の梟雄 317
六合目の仇討 339
近藤富士 355
解題 368

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

富士に死す・算士秘伝

富士に死す

一

伊兵衛は富士吉田口の大木戸の前で足を止めた。大木戸から先もゆるい傾斜が続いていた。

数台の車が並んで通れそうに幅広い道の両側に大きな門構えの家が軒を連ねていた。

元禄二年（一六八九年）夏のことである。

吉田は白衣、白股引、白脚絆の白ずくめの道者（富士山に信仰登山する人）が溢れていた。ここは町のようであったが、商家らしい家は一軒も見当らなかった。

宿場でもなかった。宿場と呼ぶにしては、宿場特有なあの華やかな喧噪の中にただよう一抹の哀愁はどこにも感じられなかった。宿場のように客の袖を引こうとする女たちの姿や彼女等の呼び声がないかわりに、中央道まで出て来て、道者や一般登山者たちにお泊りはどこかとしつっこく訊く法被姿の男たちがいた。宿坊の客引きであった。

多くの白装束の道者たちは団体を組んでいた。笠や上衣の襟に団体の名が染め抜いてあった。そのような団体の多くは、予め宿坊が決っていた。宿坊からの出迎えが二里も三里も先まで出るし、いざ団体が到着するとなると、御師自らが、紋付、袴に帯刀といういでたちで吉田の町はずれまで迎えに出た。

御師とは富士信仰において特に発展した名称で、神職と宿坊を兼業している者のことである。浅間神社の神主に隷属して神祇を行う者であったが、室町時代の頃から宿坊をも兼ねるようになった。御師と道者との関係は寺と檀家の関係に似かよっていた。世襲であった。苗字帯刀を許されていた。

道者は鈴をさげていた。道者の一団が通り過ぎるとその鈴の音で蟬の声が一時聞えなくなるほどであった。

伊兵衛はそれら道者の白い群れから眼をそらした。視界は真夏の水蒸気のために霞んで、そう遠くへ届かなかったが、白く濁った青空の深さはいかにも夏らしかった。富士山は雲に覆われていた。

道者は白一色だったが、一般登山者の服装はまちまちだった。旅支度でふらりとやって来たような人もあれば、吉田で登山の支度をととのえて、出来得るならば頂上まで登ってみようという者もいた。武士の一団は旅姿のままだった。

一般登山者は道者の数に比較すると問題ではなかった。それでも、ざっと見渡したところ、三分の一は一般の登山客だった。

宿坊から道に出て来ている法被姿の客引きの目当てはどうやら、一般登山客のようであった。道者の多くははじめっから宿は決っていた。一度決った宿坊は年が変ってもよほどのことがないかぎり変更しなかった。

法被姿の男たちはそのことを充分知っていた。彼等は一般登山客と見ると近づいて行って自分たちの宿坊に誘った。初めての者はその法被姿の男たちに宿賃を交渉した。

「宿坊は旅籠ではございません。すべておぼしめしということになっております。お泊りになったうえで、このぐらいが適当だと思うだけのものを置いて行っていただければ結構です。ただし、弁当代、金剛杖代、草鞋代、強力代なぞは実費を戴くことになっております」

法被の男は言った。旅籠ではないと言いながら、客引きに来ている矛盾をそのまま表面に出しながらも、彼等は、御師が経営するこの宿坊のあり方にいささかの誇りを感じているようであった。

「お客様、まずまず当坊へお出で下さいまし、悪いようにはいたしませぬ、なにからなにまで、お客様本位にやらせていただいております」

一の鳥居のあたりはこれらの法被姿の男たちと、登山客との駆け引きで人通りがとどこおった。

伊兵衛はその人の群れの中をかき分けるようにして前に出た。

そこに異形の男が突立っていた。頭には白布の宝冠を戴き、白麻の羽織を着用し、胸に大粒の念珠を掛け、白脚絆に白足袋、そして一本歯の高下駄を履いていた。大男である。

ひげだらけの顔の中に鋭い眼が光っていた。

「そこの若いおひと……」

と異形の人は伊兵衛に呼びかけた。伊兵衛は思わず足を止めた。

「若いおひと、富士禅定を試みるならば、三日ほど待たれるがいい。お山は荒れるぞ。大荒れだ。強いて登れば御改めに遭うことになるから登るのはやめられよ」

異形の人は一方的に伊兵衛に宣告すると、伊兵衛の背後にたたずんでいる男に向って更に言った。

「そこの御人、江戸からはじめて、この地に参った御人に申し上げる。罪業深き身に、御改めの風は持ちこたえられるものではないわい。三日待たれい。三日間、心をこめて浅間大菩薩を念ずるがいい。嵐は去り、秋のような空になる。そのとき御身は既に許されておるのじゃ」

伊兵衛はふりかえって、御人と言われている人の顔を見た。五十を越えたか越えないかの年格好の男であった。
「行者殿、ご忠告はありがたいが、なぜ山は荒れるのですか」
御人と言われた初老の男が訊いた。
「理由はない。山は荒れるときには荒れ、静かなときには静かだ。すべてこれ神のおぼしめしじゃ」
異形の人が言った。
「いや、これは訊き方が悪うございました。なぜ山は荒れるか、その理由ではなく、行者殿は、なにを理由に山は荒れると言っておられるか、それを訊いておるのでございます」
「気を知ればこそ、山は荒れると申しておるのだ」
行者は言った。
「気とは？」
初老の男は問いつめようとした。
「気とは即ち万象の呼吸よ、万象の息遣いのことよ」
「風のことでございますか」
「風もある。だが風ばかりではない。雲もある。空の色もある。温、暖、温気（湿気）も、気の呼吸よ。気の呼吸に合わせて呼吸をせよ、明日の天気がどうなるか分るのだ」
行者の言っていることは伊兵衛には分らなかったが、彼がなにか一生懸命になって、説得しようとしていることだけは確かだった。
「明日から天気が悪くなると言うのですか、つまり登山の途中で嵐にやられるというのでしょうか」
初老の男は食い下って訊いた。
「そのとおり、それも命にかかわるような嵐が来るのだ。しばらく待て。待たねばならないのだ」
行者は持っている金剛杖で大地をどんと突いた。
「ありがとうございます。だがこんなに天気がいいのにのう」
と初老の男は空に眼をやった。
その初老の男の袖を法被の男が引張った。初老の男は引張られるままに行者の前を去った。伊兵衛もなんとなく初老の男の後に従った。
「おつれですか」
と法被の男は伊兵衛に声を掛けた。その初老の男と一緒かと訊かれたのである。伊兵衛は首を振った。
「丁度お二人部屋があいておりますがいかがでしょうか、今日はどうやらここらあたりが御到着のおしまいと思いますので、ゆっくりと足を伸ばしてお休みになれます」
と法被の男は西の空を見上げて言った。太陽は山の向うにかくれていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

「あの行者は……」

初老の男は、泊る泊らないは後廻しにして、まず、異形の行者のことを訊いた。

「あの人ですかい、あの人はね……」

と言いかけて、ここでは大きな声で話はできません、どうぞこちらへと言うように初老の男の先に立って歩き出した。伊兵衛もその後に従った。

「お客様、あの行者は、月行倒仲という人でございます。富士講の始祖、角行様から数えて五代目に当るお人でございます」

法被の男はそこで初代角行が富士の人穴にこもって苦行を続け、正保三年に百六歳で死んだ話から始まって、二代目の日行（日旺）が角行の教えを引き継ぎ、これを三代目の旺心に伝え、旺心が寛文十一年に死ぬと四代目月旺が富士行即ち富士講の教主となったところまで話して一段と声を高めた。

「四代目の月旺様は俗名前野理兵衛という人です。私も月旺様には以前に一度だけお目にかかったことがあります。いかにも角行様の後を継ぐにふさわしい顔をした行者でありました。その月旺様に二人のお弟子がありました。一人は月心様でもう一人があの月行様です。月旺様は二人の弟子にそれぞれ五代を譲ったのでございます」

法被姿の男はかなりよく知っていた。知っているというよりも、客を引くための知識でもあるかのように見えた。言葉によどみがなく滑りがよかった。しかし法被姿の男は、それだけのことしか知らなかった。角行以前の富士信仰についてはなにも知らないようであった。

富士山を対象とする信仰は非常に古く、浅間神社の名が記録されている最古の文献は『文徳実録』で、これには仁寿三年（八五三年）七月に駿河国浅間神社が従三位に叙せられたと記されている。

富士山信仰が実践宗教的色彩を帯びて来たのは、僧末代が富士山に登るようになってからである。久安五年（一一四九年）ごろには多数の僧が登山している。僧末代は浅間大菩薩を信仰した。それまでは木花開耶姫を祭神としていたが、僧末代のころから神と仏が合体して、浅間大菩薩という宗教対象が生じ、これが幕末まで続いたのである。天正年間（一五七三年―一五九一年）になって、角行が富士山麓人穴にこもって荒修行して、富士行即ち富士講の基礎を固めて以来、富士信仰は急速に大衆化したのである。

「角行様から数えて五代目が二つに分派したというのですね。するとそのどちらが、角行様の正統を継ぐ行者様なのでしょうか」

「だから、両方だと言ったでしょう。四代目月旺様は月心

様と月行様とを御膝元に呼ばれて、私が死んだら、月心は初代角行様の教えを固く守れ、月行は初代角行様の教えを開けと仰せられました。そして去年亡くなられました」
「どちらとも決めずに死んだというわけですね」
「いや、月旺様は五代目をわざと二つに分けたのです。教えを固く守るほうが五代目月心様、教えを開くほうが五代目月行様です」
なるほどね、と初老の男はどうやらそれで分ったようであった。
法被の男は、中央道の中ほどで足を止めて、
「さあ、こちらにどうぞ」
と右手を、中央道とは直角に奥の方へ続く道を指して言った。
道の両脇に石灯籠が並んでいた。それぞれに寄進者の名が刻まれていた。
十間ほども入ったところに、大名屋敷の門のような黒塗りの門があった。その奥に大きな宿坊があった。
「吉田でも特に名が高い、御師の田辺伊賀様の宿坊です」
と法被の男は言った。
法被の男は家の中から出て来た男に、二人を引き渡すと、直ぐ中央道のほうへ引き返して行った。
二人は案内されるままに裏に廻った。庭に面したところに縁側があり、その縁側の下の小溝をきれいな水が音を立てて流れていた。
「どうぞ、ここで足を洗って下さいまし、中から案内の者が参ります」
と第二の法被の男は姿を消した。ここで足を洗えと言われても、さて、どのようにして足を洗うのか、二人が顔を見合せているところへ、二十人ほどの白装束の道者の一団がやって来て、揃って縁側に腰をおろすと草鞋を脱いで、縁側の下を流れる水に足をつけた。二人はそのとおりにやった。歩き疲れてほてった足に、そのつめたい水は快かった。
二人は部屋に案内された。二人部屋があると言ったのは嘘で、道者たちと一緒の大部屋だった。
「去年はたたみ一畳に一人の割合だった。それにくらべたら今年は楽なものだ」
と道者たちは話し合っていた。
伊兵衛と初老の男は部屋の隅で小さくなっていた。その部屋に入った道者の団体は二十二人いた。法被姿の男が来て、
「禊をしてから、浅間様にお祓いを受けに行きますから、用意をして下さい」
そう言ったついでに、伊兵衛たちのところへ来て御一緒

にお願いしますと誘った。

宿坊の庭は広く、樹木はよく手入れがしてあった。庭の隅に滝が三つもあった。道者たちは次々と裸になって滝壺の中に入って行った。滝に身体を打たせる者もあり、滝の水を身体につけるだけの人もいた。

伊兵衛には六尺ほどの高さの滝が一丈ほどの高さに見えた。滝の音が恐ろしいほどに聞えた。彼は滝の水で身体を拭いただけで滝を出た。

浅間神社に行って神主のお祓いを受けた後で、金鳥居の下の登山改め所で一人百二十文ずつの山役銭（入山料）を払って登山手形を貰った。明日でもよいのだが明日は朝が早いし、このような事務的なことは今日のうちに済まして置いたほうがいいだろうと法被の男が言ったので、その通りにしたのである。

宿坊に帰ると、奥の部屋に案内された。そこに神殿が設けられており、神官のなりをしたこの宿坊の主、御師の田辺伊賀が、神殿の前で御神語を唱えた。道者たちはこれに唱和した。伊兵衛にも一枚の紙が渡された。それはなにか読めない字が刷りこんであった。読めない字を人々は唱和していた。伊兵衛の隣の道者が、御神語ですよと教えてくれた。

篠俤大馘妙王馘躰枩坊光俤心（コウクタイソクミョウオウソクタイシツボウコウタウシン）

そう読むのだと道者が教えてくれた。伊兵衛にはなんのことだか分らなかった。

同じことを、区切りをつけて、繰返し繰返し唱和している道者たちの感悦した表情だけが印象に残った。

神殿の前での祈りが終ると夕食が出された。道者の中には酒をたしなむ者もいたが乱れる者はなかった。

食事が終ると、翌朝の準備であった。登山に必要な品は全部宿坊に取り揃えてあった。

「さあ、さあ、強力衆は今夜のうちに決めて置きなされ、明日になってはどうにもなりませんよ」

と宿坊の男たちが大声で呼び歩いていた。

明朝早く出発したとしても、どうしても途中の石室（いしむろ）で一夜を明かさねばならない。順調に行って下山するのは明後日の午後となる。最低限四食分の食事と、途中の石室に泊る際のどてらが必要である。強力はこれらの荷物を五人分まとめて背負うことになっていた。多くの登山者は宿坊のすすめによって五人ずつ組んで一名の強力を頼んだ。

「二人で強力一人をお願いすることは無理ですか」

初老の男は法被の男に訊いた。

「さあ強力衆がなんて言うか、強力衆はどてらの数だけの

料金を貰うことになっておりますので」
と法被の男は言った。
強力は付近の農民の夏場の収入源だった。宿坊はこれらの強力に、宿坊の名入りのどてらを貸し出し、それを持ち帰ったときにそのどてらの数だけの荷上げ料と案内料金を強力に支払った。登山客と強力との金銭のやり取りは禁じられていた。強力斡旋料も宿坊の収入の一つであった。
「どてらを四人分お借りしたらいかがですか」
「お客様が四人分のどてら代と案内料を支払って下さるならば、こちらとしてはいっこうにかまいません」
六十を幾つか過ぎた人の好さそうな強力が連れて来られた。
「このお客様は二人で四人分のどてらが御入用だそうだ。ていねいに御案内するのだ」
と法被の男は強力に言った。強力はへいと答えただけだった。
伊兵衛は終始つんぼ桟敷に置かれていた。伊兵衛は十九歳だった。なにも強力を頼まずとも、あれくらいの荷物なら自分でも運ぶことができると思っていた。初老の男が勝手に雇ってしまったからには万事初老の男が責任を持つだろうと思ってはいたが、一応はちゃんとして置かねばならないと思った。
「旦那様、私のことなら、私一人でなんとかいたしますから」
と伊兵衛は言った。
旦那様と言ったのは、言葉の様子や物腰から相手が江戸の商人と見たからであった。
「なあに、余計な心配は要らないよ。私はね、あなたのような若い人と連れになっただけでたいへん気強く思っているのですよ。申し遅れましたが、私は江戸本町の喜左衛門と申す者です」
と初老の男は初めて名乗った。
「私こそ御挨拶が遅れて申しわけございません。私も旦那様と同じ本町の薬種問屋伊勢屋の丁稚……いえ番頭見習いとして働いている伊兵衛と申す者でございます」
丁稚と言ってからあわてて番頭見習いと言い直したので、喜左衛門は笑いながら、
「お若いのに富士詣でとはなかなか奇特なお心掛けでございますな」
と言った。
「いえ、これは主人長右衛門の申しつけでして、言わば代参の代参のようなものでございます」
伊兵衛はまずそう前置きして置いて、代参の代参がなんであるかを説明した。長右衛門は昨年以来身体の具合が悪

かった。薬種問屋だから薬には明るいし、医者との交際もあった。あれこれと薬を飲んでみたがさっぱり効き目がない。人にすすめられて、祈禱師に拝んで貰うと、富士の御神水を飲めば病気は治ると言ったので、番頭が主人の長右衛門に代って富士登山をすることになったが、その番頭が出発間際になって、腰を痛めた。いわゆるぎっくり腰である。他にも番頭がいたが、長右衛門の言いつけで番頭見習いの伊兵衛が、富士の御神水取りを命ぜられた。山登りには若い者のほうがよいだろうという配慮からであった。

「それはそれは大役ですね。御神水を戴くとなると、なにがなんでも頂上まで行かねばなりませんからね」

と喜左衛門はそう言った後で、

「私のほうは、大きな声では言えませんが、まあ、物見遊山のようなものですから気は楽です。同じ江戸の本町に住んでいるというのもなにかの奇縁でしょう。よろしくお願い申します」

喜左衛門は打ち解けた顔をした。

明朝の用意がすっかりできると後は寝るだけだった。宿坊に対するおぼしめしは下山した折に支払うならわしになっていた。当時の富士登山は吉田口から登山すれば下山も吉田口ということになっていた。吉田口から登山して大宮(本宮)口に下山するのは山を割ると言って嫌われていた。

伊兵衛は庭に出た。

薄暗くなった滝のあたりに人声がした。一の鳥居のところで見掛けたあの行者が滝に打たれながら一心不乱に御神語を唱えていた。

伊兵衛が近づいても五代目月行劍忡は気付かぬようであった。

水は冷たい。この冷たい水の中で全身を水に打たせていたら凍えてしまうだろうと伊兵衛は思った。行衣を伝わって流れ落ちる雫の下に小さな飛沫が上っていた。

伊兵衛には、月行が唱える御神語と称する文句がひどく気になった。

彼はその隣の滝壺から上ったばかりの道者に御神語の文句の意味を問うた。

「あれはお身抜きと申してな、行を重ねなければ分らない御神語だ」

道者はお身抜きという分らない言葉を口にした。

「いったい、お身抜きってなんでございますか」

「それはな、開祖、角行様が苦行に苦行を重ねた末、浅間大菩薩からさずかった御神語のことだ」

「つまり御神語がお身抜きで、お身抜きが御神語なのですか」

伊兵衛はそう言いながらこの道者もよくは分ってはいな

いのだと思った。
「神のお告げを文字に書き、口にした場合が御神語になり、お身抜きになるのだ。お身抜きは御神語を書いた、有難いお札でもあるのだ」
やや具体的になったその説明の糸をたぐるように伊兵衛は更に訊いた。
「道者さんたちが禅定という言葉を盛んに使っておられるようですが、なんのことですか。それから御改めに遭うということが分らないのです」
「禅定とはな、登山のことだ。もともとは仏教から来たものだろうが、富士山では登山のことを禅定というのだ。御改めとは、禅定中に嵐に遭ったり、病気を発して死ぬことを言うのだ。お前様はまだ若いから、禅定の前には充分に精進潔斎しなければならぬ、身のけがれは心のけがれ、心のけがれこそ、御改めにも通ずるのだ」
道者は去った。滝の音と共に月行が御神語を唱える声が聞えて来た。

二

朝靄が山峡を埋めていた。
「今日はよい天気だぞ」
お山は晴天だ、などと言う声が宿坊の前に溢れていた。
大人の声の中に、少年の声も混っていた。
登山姿で宿坊の門を出ると、そこに多数の少年が群がっていて、
「びっき、まきやれ（鐚銭、撒きやれ）、おん道者。まきやれ、まきやれ、おん道者」
と声を合わせて叫んでいた。叫び方も両手をさし出して銭を乞う姿も、なんとなく板についていた。道者の一団の中の先達とおぼしき者が前に出て、
「そうれびっきだ、お山は晴天」
と言いながら銭を撒くと、子供は争ってその銭を拾ってから、
「もっと撒きやれ、撒かなきゃ、お山はおんたれぞ」
と歌った。おんたれとは富士登山の道者たちの使う用語で、雨降りのことであった。
喜左衛門と伊兵衛は道者の一団の後に従って外に出た。浅間神社の金鳥居のところで登山手形を見せて、神社に参拝してから、そのまま境内を抜けて登山道に入った。
富士山麓の道は長かった。ゆっくりした登り坂を馬返し（竜ヶ馬場）まで来ると、そこに馬子たちが待っていて、
「天気にしてえなら御神酒の銭を撒いてくだせえよ、撒きなされ、撒きなされ、のう御道者」
と口々に銭を乞うた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook